

パネルディスカッション サブテーマ②



パネルディスカッション サブテーマ②

令和3年11月19日（金）9：30～11：00

SOSの声とつながり、社会的孤立を防ぐには

コーディネーター **鈴木 秀洋氏**

日本大学危機管理学部准教授

パネリスト **鴻巣 麻里香氏**

KAKECOMI代表・ソーシャルワーカー

星山 麻木氏

明星大学教育学部教授・
（一社）こども家族早期発達支援学会会長・
（一社）星と虹色なこどもたち代表

渡辺 篤氏

現代美術家

オブザーバー **和田 幸典氏**

厚生労働省政策統括官（総合政策担当）付
政策統括室政策企画官



▼鈴木：コーディネーターを務めさせていただきます、鈴木秀洋です。どうぞよろしくお願いいたします。

私自身の研究テーマは、生きづらさを抱えたり、社会的に孤立した状態であったりといった多様な一人ひとりが、安全・安心に過ごせる社会を実現するための社会制度設計、すなわちダイバーシティ・アンド・インクルージョン、その具体化・実行化です。鎌倉市の共生社会の実現を目指す条例制定の座長もやらせていただきました。本日はこうしたテーマに関して各分野でご高名かつ地道な活動をなさっている方々にお集りいただきました。テーマは重いです。明快な解決策が提示できるものではないでしょう。しかし、熱量高く、そして、皆様一人一人がこのパネルを視聴した後に、一歩動き出してみようと思えるようなパネルをお送りしたいと思います。

私から、まず、パネリスト全員のお名前を紹介させていただきます。お名前をお呼びいたしますので、一言ご挨拶いただければと思います。鴻巣麻里香さんです。

▼鴻巣：鴻巣です。よろしくお願いいたします。

▼鈴木：渡辺篤さんです。

▼渡辺：おはようございます。渡辺篤です。よろしくお願いいたします。

▼鈴木：星山麻木さんです。

▼星山：星山麻木です。よろしくお願いいたします。

▼鈴木：和田幸典さんです。

▼和田：和田です。よろしくお願いいたします。

▼鈴木：それでは、自己紹介も含めまして、個々の発表に入ります。まず、最初和田さんからお願いいたします。



▼和田：資料のほうをよろしくお願いいたします。厚生労働省政策企画官の和田と申します。本日はテーマにあります、社会的孤立を防ぐ取組について、政府のほうで今、孤独・孤立対策に力を入れてやっておりますので、政府としての取組について、まず包括的にご紹介させていただきます。

私は厚生労働省で今、政策企画官をやっておりますけれども、孤独・孤立対策室と併任をしておりますので、この立ち上げ時から関わっているメンバーの一人ということになります。

ちょうど今から1年前ぐらいですね、新型コロナウイルス感染症が長期化することが明らかになってきて、社会的孤立についてはかなりもともと問題だということで、昨日のテーマにもあったと思いますが、厚生労働省としては地域共生社会の創設にあたり、各種の施策を打ってきております。加えて、新型コロナウイルス感染症によって人の接触の機会が減った、やはり隔離とかいろいろな状況の中で、孤独の問題ということも非常にフォーカスされてまいりまして、こういったことに何らか手を打っていかなくちゃいけないという

ことが明らかになってまいりました。今年の2月、総理から当時の坂本大臣に対して、孤独・孤立対策担当大臣の任命が行われまして、政府として孤独・孤立対策を進めるということが明らかにされたところです。

その後1年ほど対策を進めてきております。例えば支援を行っていらっしゃるNPOの方々に集まっていただいて、フォーラムを開催する。一体、孤独や孤立の問題に対してどういう問題が起こっているのか、どのような対策を打てばよいのかといったことを、現場の皆様のお話を伺いながら政策を決めていくことをやってまいりました。3月には緊急支援策ということで、そういったNPOの方々に対する支援策も公表いたしました。その後、政府全体として孤独・孤立対策に関わる関係部署を集めまして、孤独・孤立対策室が司令塔となって、孤独・孤立対策を進めてきております。また、孤独・孤立対策については世界的にも、今ちょうど潮流ができておりまして、一番初めに孤独担当大臣を置いたのはイギリスなんです。そちらとも連携をしながら、それぞれの対策を進めてきている状況になっております。

孤独・孤立対策に取り組むNPOへの支援を、今年3月に発表させていただきまして、また、近日中に取りまとまる政府経済対策でも同様の措置が継続されることになっています。生活支援や自殺防止の対策、フードバンク、子ども食堂の方々への支援、子供の居場所づくりの活動、女性に寄り添った相談支援体制の確立、住まいの支援、こういった5つの分野に対して、NPOの方々に対する直接補助、または都道府県・市町村を通じた補助の仕組みを創設しまして、現場の方々の活動を支援するということが、孤独・孤立対策の一つの柱になっております。

孤独・孤立という問題は、人生の様々なステージによって起こることだということが分かってきております。生まれたとき、児童虐待の問題、貧困の問題から、学生の悩み、妊娠・出産・子育て期の孤独・孤立、高齢期のひとり暮らし、フレイル、介護の問題、いろいろな場面で、孤独・孤立の問題ということは起こりますし、それぞれに対してまず現状ある施策を整理し、これに対して横串を刺すことでどのような相乗効果を生むことができるかといったことを、今、孤独・孤立室では整理しています。特に孤独の問題というのは、これまで高齢期の社会的孤立は非常に問題になってきましたけれども、今回コロナが明らかにしたのは、やはり学生期、また若者の間でも孤独の問題が広がっている。こういったことも明らかになり、より幅広い支援策の確立が必要だということが明らかになってきています。

現在、社会的孤立に関してはいろいろな調査があり、かつ社会的孤立に関しては、割と客観的な指標だということが明らかになっています。一方、孤独というのは自分がどう感じるかという問題にも関係いたしますので、孤独と孤立も、厳密に言えば少し対象が異なっている概念です。こういった孤独、また孤立の問題を調査をし、どのような方の間に孤独・孤立がより広がっていくか、そういったことを明らかにすることによって、孤独・孤立対策を的確に進めることができるのではないかと。ということで、この12月から調査を進めることとしております。こういった結果が取りまとめられれば、よりデータに基づく孤独・孤立対策を進めることができるんじゃないかと思えます。

また、孤独・孤立対策の一つの柱といたしまして、支援を行う方々に、より支援の情報

が届くようになってほしい。また、困った状況にある方が、みずから支援策に簡単にたどり着けるようにしたいということで、孤独・孤立対策ホームページを作りまして、その中に支援策を一覧できるポータルサイトを作っております。資料上は8月頃公開予定となっておりますが、ちょうどこの11月2日に公開をすることができました。いわゆるチャットボット機能を使いまして、いろいろな状態にある方が行政の支援策に、より簡単にたどり着けるようなホームページです。公開以来、非常にアクセス数も増えておりまして、この1週間でも1日4万件を超えるアクセスをいただいておりますので、困っているご本人の方、また支援者の方それぞれの立場から使いやすいものになっているのではないかと思います。まだ公開したばかりですので、ご意見をいただきながら今後も改良を進めていきたいというふうに思っています。

政府としては、先ほど申し上げたようなNPO等への支援、また支援策の整備、ポータルサイトの構築。全体としては声を上げやすい社会の構築が一番大事ではないかと思っております。孤独・孤立対策を進めることで、孤独状態、孤立状態にある方が困っているという状況からより声を上げやすいようにいたしまして、支援策に届きやすいようにすること、まだ孤独・孤立対策は始まったばかりでもありますけれども、支援者の方々と一緒に作り上げていく政策ですので、本日のセミナーでの意見も参考にしながら進めていきたいと思っております。どうぞ皆様のご協力、ご参加をよろしくお願いいたします。私からの発表は以上です。

▼鈴木：和田さん、どうもありがとうございます。

続いて鴻巣さん、よろしくお願いいたします。



▼鴻巣：鴻巣です。よろしくお願いいたします。皆さん、改めましておはようございます。福島県の南の端っこ、白河市の小さなお茶の間、さらにそのこたつの中からぬくぬくとお送りしております。ソーシャルワーカーの鴻巣麻里香です。今、私がいるこの場所は、まかないこども食堂「たべまな」という子ども食堂です。

まかないこども食堂「たべまな」は、KAKECOMI(カケコミ)という小さな市民団体が運営しております。KAKECOMIという名前は、駆け込み寺とコミュニティを合わせた造語です。安全な逃げ場所であり、かつ地域に閉ざされていない、そういった意味を込めました。

KAKECOMIの事業は3つ。まず子供と親子のおいしい居場所、まかないこども食堂「たべまな」。そして困窮する女性のハウジングファースト支援であるシェアハウス、いわゆる民間シェルターと呼ばれるものです。そして、とりあえずの困りごとを持ち込めるソーシャルワーク相談室です。

KAKECOMIの活動を通じて出会うのは、「助けて」が言えない女性たちです。なぜ「助けて」が言えないのか、一体何が「助けて」という言葉を奪うのか。私たち対人支援、つまり困っている人の支援を仕事にする人たちは、困ったら気軽に相談してくださいと言います。息を吐くように、そういうふうに言っ

ているかと思います。ですけれども、相談するというのは実はとても難しいことです。

なぜそれが難しいのか。困ったときに助けを求める、それを難しくしている要因が、KAKECOMIの様々な出会いから浮かび上がってきました。まず、福祉制度の申請主義。次に、その申請主義が生み出す制度の隙間。さらには逆境的经验による心的外傷、いわゆるトラウマの影響。そして女性差別という構造による生きづらさの不可視化、つまり見えなくなっていることです。

困っている人はどこにいるんだろうと、ソーシャルワーカーとして、もう15年以上、様々な組織に所属しながら活動してまいりましたが、ずっとこう考えていました。医療機関や福祉施設に所属して私たちが支援できるのは、みずから助けを求めにやってくる方々ばかりです。では、その「助けて」という声が奪われた方々は一体どこにいるのか。いろいろなところで働きながら、ずっと誰かを置き去りにしてしまっているような気がしてきました。

では、一体何が「助けて」の言葉を奪うのか。まず、申請主義というものがあります。日本の福祉制度では、困っている人がみずからこうしてほしいとリクエストしないと、基本的には支援が受けられません。その支援を受けるためには、まず自分が何に困っているのかを自分で理解する、そして相談機関の窓口に出向いて、その対応する職員の方が理解していただけるように説明をする。それは、見ず知らずの人に自分の苦しかったこと、誰にも話したくないし思い出したくないような体験を話すということであり、その結果、この人は支援を受けるに値するという評価を受けて、初めて支援というものが受けられます。これはすごくストレスフルなプロセスかと思

います。

申請主義は、制度に隙間を作ります。私たちが運営するシェアハウスの利用者は、その制度の隙間に陥った人々です。例えば18歳、19歳の児童でも成人でもない（2021年11月現在）虐待の被害者たち、例えば身体的暴力を伴わない家庭内暴力、心理的DVや経済搾取の被害者たち、あるいは配偶者以外の親族から虐待を受ける成人女性などです。その全員が様々な、どの制度にも引っかけられない隙間に陥ってしまって、どこともつながれず、ただ相談の回数だけを重ねて、そして孤立を深めることになっていました。

そして、そもそも虐待や暴力の被害に遭って困窮すると、自分が誰かに助けてもらう価値がある存在だと実感できなくなってしまうんですね。トラウマ、心的外傷によって、自己価値というものがすごく損なわれてしまいますので、自分には価値がないと信じてしまう。自分は誰かに助けてもらう価値がないんだという強い強い信じ込みがあると、誰かに支援を求めることができなくなったり、あるいは自分を傷つけたり、進んで不幸になっていってしまうような選択をしてしまいます。その結果、周囲から、あの人は好きで不幸になっているというように誤解され、さらに孤立してしまいます。いわゆる自己責任論になってしまうわけです。

そして、特に女性の生きづらさが見えないのは、女性差別、ジェンダー差別という構造があるからだと考えています。なぜ女性の、そして子供の生きづらさが見えないのか。一つには、性被害や搾取のリスクが高い女性、そして保護よりも補導されてしまうリスクの高い子供というのは、路上だったり公園といったパブリックな空間の中に、安全な場を得にくいということがあるかと思っています。家庭が

とても困窮して、あるいはそこに暴力だったり搾取だったりがあっても、パブリックスペースはより危険な場所なので、避難場所にならない。そうすると、暴力や困窮がある家に閉じ込められてしまう。あるいは、女性や子供という属性、性差や子供というその属性が商品価値があるとして扱われて、その引き換えに、例えばお部屋とかお金が提供される。性産業であったりとか、SNSなどを通じた「#神待ち」とか「#家出少女」などですね、そういった搾取構造に絡め取られてしまうことになります。

パブリックスペースから排除され、女性の生きづらさというものがどんどん見えなくなっていくってしてしまうわけです。また、意思決定や報道の場所で、女性や子供はまだまだ、ごくごく少数派です。パブリックスペースからの排除も、意思決定の機会からの排除も、やはりこれはジェンダーだったりとか様々な差別の構造かと思います。その差別構造が、女性や子供の生きづらさを見えなくして、「助けて」の声を封じてしまっています。

奪われた「助けて」という言葉を取り戻すことは、とてもとても難しいかと思います。それは社会構造の問題だからです。なので、私たちは「助けて」と言わなくてもお互いに気づき合い、支え合える場所、制度の隙間に置き去りにされた人々のための逃げ場所をつくることで、その構造に小さく小さくあらがっています。

その事業が、まずソーシャルなお茶の間であるまかないこども食堂「たべまな」、そして安全な家出場所であるセーフティーシェアハウスです。

これが「たべまな」、子ども食堂の様子ですね。「たべまな」では、子供は賄い、大人はカンパがルールです。子供はまかない、つまり

一人一人が何かの役割を持って、その対価というか賄いとして御飯を食べるというルールです。大人はご自身の懐と相談しての投げ銭の寄附、カンパで場を支える。大人と子供がそれぞれにできることで場を守っていく同志になる、そういった関係を大事にしています。

同時に、子供たちが何らかの困難を抱えているとき、そのときは裏メニューとして専門職が支援します。私、ソーシャルワーカーだけでなく、児童精神科の先生や弁護士、産婦人科のドクターなどが子供たちを支援しています。ほとんどの専門職が大体プロボノであったりとかいろいろな制度を活用して、非常に安価で支援してくださっているんですけども、専門家同士がこの「たべまな」の子供たちや親子を通じてそれぞれ直接つながって、それぞれの支援に互いの力を生かしていくというネットワークがそれぞれの仕事に生かせるということで、ウィン・ウィンの関係ができています。このまかないルールと裏メニューによって、子供と大人との間に、してあげる・されるという関係が固定化してしまうことを防いで、同時に困難を放置しないというバランスを模索しています。

こちらがシェアハウスの写真です。3世帯が入居できるようになっています。ちょうど今日ですね、まさに今日の午後もう一軒、新たにシェアハウスの運営を始めまして、これで入居できるのが合計5世帯、小さなお子さんをお持ちの親御さんだったりすると、合計で8人ぐらいいは入居できることになります。

シェアハウスでは、制度の隙間に陥ってしまった女性たちの住居支援を行っています。シェアハウスで「助けて」という一言が言えずに孤立する人たちの住居支援を行い、そしてこども食堂「たべまな」で、「助けて」って言わなくても何となく人と、そして支援と

つながれる、そういった場づくりをしています。誰かを支援することを生業としている私たちは、当事者の「助けて」と言える力に、SOSを出せる力に依存していると言えるかと思います。対人支援者である私たちこそが、助けてと言える力への依存から抜け出すにはどうしたらいいのか、後半は皆さんと意見交換したいと思っています。

▼鈴木：鴻巣さん、どうもありがとうございます。盛りだくさんで時間が全然足りないと思いますが、後半にお時間をお取りして、皆さんで話せればと思います。どうもありがとうございます。

それでは渡辺さん、お願いいたします。

▼渡辺：改めまして、こんにちは。私は、現代美術家の渡辺篤といいます。私は過去に、足かけ3年の引きこもりの当事者経験を持つ現代美術家として、社会復帰後、精力的にこれまで作品の制作活動を行ってきました。今回は作品や、主宰するアートプロジェクトについて紹介させていただきます。

最初に「同じ月を見た日」というアートプロジェクトです。昨年4月7日は、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言が初めて首都圏に発出された日で、奇しくもこの日は1年で一番満月が大きく見える日でした。今ではZoomをはじめとするビデオ通話が普及していますが、必ずしもデジタルを介した方法だけが、コロナ禍に他者とつながる方法ではないと考えまして、また、孤立問題に対する根源的な態度とは、姿の見えない不在者に対しても想像力を働かせることと考え、その媒介として、各自の場所から夜空の月を見るというプロジェクトなんです。

「コロナ禍に孤立感を感じる」という条件の募集に対して集ったメンバーが、現在国内外に約50名います。私はスマホに接続する

小型の望遠鏡を、彼らに無償提供しました。メンバーの中には、引きこもりや、海外でロックダウンに遭った人なども含みますが、世界のどこからでも我々は同じ月を見ることができます。写真はこれまでに1,500枚以上集まり、それらをライトボックス化させた作品などもあります。さらに、メンバーには展覧会場に来られない人も一定数いますので、会場につるされた、こうした球体のライトを、各自のスマホで遠隔操作できるという作品もあります。それらが展覧会場でついたり消えたりするわけですが、そうすると、そこに来た鑑賞者は、ここにいない誰かについて想像を巡らすことができます。ほかにも、月の写真を月齢順、月の満ち欠け順に動画編集し、コロナ感染リスクを減らした、こうした半屋外の会場でプロジェクションするというような作品も作りました。

次に、これは私なんです。ここで改めて、私の引きこもり経験について触れます。私は大学卒業後、様々な居場所の喪失を一遍に経験しまして、実家の自分の部屋にしか居場所がなくなってしまうと、だんだんと、もうこの社会には戻ってこない覚悟で、片道切符でそれを続けていました。しかし、ひよんなきっかけで父親の支配から逃れることや、弱り切ってしまった母親に寄り添うことの必要性に気が付きまして、結果、ある日突然、憑き物が本当に落ちたように、引きこもりを終えることになりました。

引きこもりを終える日に、私は先ほどのような写真であるとか、こうした部屋の写真を撮り残したんです。ちょっと強烈ですね。荒れ果てた様子ではあるんですけども、気がついたことがあります。こうしたこれらの写真は、引きこもった長い時間が存在しないと撮影できないものであるということなんで

すね。引きこもった時間は、ともするとこうした写真作品の制作期間だというふうに捉え直すこともできるんじゃないかということを考えました。

そこで、私がアーティストとして現場復帰後に、現在引きこもり生活を送る人々にも広く呼びかけをしまして、あなたの今、生活している部屋の写真をみずから手で撮影し、一緒に写真集を作りませんかという発信、募集を行いました。結果、引きこもりの方々からの部屋の写真が約160枚ほど集まりまして、この活動は「アイムヒア プロジェクト」という名前です。プロジェクトの意味は、「私はここにいる」という意味があるんですね。当事者たちは、写真を提供してくれたわけですが、その方々に対して助成金から、私は写真の提供費を支払いました。いわば、引きこもりでないと手に入れないお金であり、引きこもった時間を肯定するような意図があります。

送られてきた写真には、いわゆるごみ屋敷のようなものもあるんですけれども、反対に自罰的なほどに断捨離を行う人もいます。引きこもりイコールごみ屋敷ではありません。ほかには国家試験の勉強を行いながら部屋から出られなくなった人、封建的な家庭で生きている人など、部屋の様子からだけでも様々な当事者の在り方を知ることができます。

このプロジェクトの背景には、引きこもりを無理やり部屋から引きずり出す暴力的支援団体の存在や、ジャーナリズムの名の下に、人権侵害的な発信を行ってきたマスメディアに対する批判やカウンターとしての意図もあります。ニュース番組やワイドショーなんかで、引きこもりの部屋を映したいという名目の下、ずんずんと中に入って行って、扉を壊

して引きずり出したりというような番組が、最近でもしばしばあったんですよね。それらに対する当事者との協働の中での反対の声明というか、みずから写真を撮れる人、発信できる人と一緒に協働を行ったわけです。

次に、この作品は引きこもりの元当事者である私が、再度一時的に引きこもりの環境に自分の身体を閉じ込めるというパフォーマンス作品です。日本には少なくとも110万人以上の引きこもりがいてと言われ、このコンクリート製の箱はその単位の一つであり、また、人の死や再生を表す装置と言えます。私はこの箱の中に生き埋めになって、1週間を過ごしました。これは今現在、孤立状態にある人の精神性や身体性を、私自身に憑依させるという意図があります。私は引きこもりの当事者経験から時間がたって、社会化していくとか、そうした中で、自分の引きこもりの精神性というのも、もう今は全くないんですね。だからこそ、そういうこともあって、今引きこもっている人の精神性、身体性、こういうふうにかきそめではあるけれど、一旦壁の向こう側に行くというような表現を行ったわけですね。7日後、みずからの意思で、中から金づちで割って出てきたわけです。

次に、修復のモニュメントというシリーズです。複数人の引きこもり当事者と私が直接対話をしながら、おのおのにとってのトラウマや生きづらさをテーマに、破壊・修復・再構築を行う共同制作の企画です。例えば、中学時代のいじめをきっかけに、10年に及ぶ引きこもりを行った男性と共同制作をしたものです。彼は引きこもりの期間に、中学時代の卒業アルバムを破壊してしまい、もうこの世にそのアルバムはありません。そのアルバムを再現的に一旦コンクリートで作し、あえて一緒に壊しまして、陶芸の伝統的な修復技法

である金継ぎを応用して修復をしました。これは経験のナラティブ化、物語的化というような意味もありますけれども、そうした再認識の行為と言え、また、金継ぎというのは痛みの経験を自己肯定していくというふうにも言えるかと思います。先ほどの部屋の写真募集のプロジェクトもそうだったんですけれども、参加した多くの引きこもりの当事者たちは、こういうふうなアートプロジェクトに参加することをきっかけに、主体的に、また展覧会場に足を運んでくれたりもします。また、一般の来場者の方々と、その現場で交流してくれる状況なども多々生まれました。

最後に、私が海外でも活動展開をしている報告です。孤立課題をテーマに私が活動して以降、イギリス、ドイツ、ベルギー、韓国などから、展覧会やシンポジウムのオファーをいただきまして、これまでここ数年間、そうした場所に行ってきています。中でも、この写真はロンドンなんですけれど、ロンドンでは日本の引きこもりという概念は知られていまして、そのまま引きこもりをアルファベット化して、ヨーロッパでも伝わっているわけですね。現地の精神科医やメディア関係者らと意見交換も行いました。ただ、このとき感じたのは、当事者経験者というのが私しかそこに参加していなかったということ、社会包摂というようなニュアンスでの議論というのは、このイギリスにおいては階級社会ゆえか、当事者に対する上から目線の支援意識も感じてしまいました。

以上なんですけれども、現在はアフターコロナの孤立課題に対するアートプロジェクトの準備をしています。ご期待くださいませ。共有を終えます。ありがとうございます。

▼鈴木：渡辺さん、どうもありがとうございます。コーディネーターの役割を忘れて、

見入り、聞き入ってしまいました。

それでは星山さん、お願いいたします。



▼星山：星山です。よろしくお願いします。

私は、来年で40年になるんですけれども、ずっと少数派の子供たちの支援を専門にしてきました。きっかけは、鎌倉市にあります養護学校の、最重度の子供たちのクラスを担当したところから始まっています。現在では、いろいろな発達、後ほど出てくる発達障害というキーワードがありますが、私はまさにSOSを出せない、どうやって孤立を防ぐかという観点から、発達障害という言葉はなるべく使わないようにしておりまして、今日も副題は発達多様性の尊重と受容ということでお話をしていきたいと思います。

うちの子は発達障害ではない、だけど助けてほしい。私のもとには日々こんな声が届いてきます。あの子は障害児じゃないよね、だから特別扱いはできないの。あれは甘やかじゃない。あれ、何か社会に出たら困るんじゃない。このような声も、学校や支援者の中からよく聞かれる声ではないかなというふうに思います。

あの子は私たちと違うよね、同じことできないんだよね。だから仲間外れにしてもいいんだよね。これは心の中で、実際に聞いたことがある言葉ではないですけど、多分子供たち、あるいはお父様、お母様などが、自分とは違うタイプの人間を見ているときに、何と

なく心の中で感じているのではないかなと思うような言葉です。

私は障害はないの。私は診断もついてないの。だから頑張れる。みんなと同じにできる。私は特別支援はいらない。これはとても多くの方から聞く言葉です。でも、つらい、学校行きたくない。部屋に入れない。初めてのことはどきどきする。そして、みんなのいるところは入るのも、人間が好きなのにつらい。でも、困っているのにSOSを出せないし、頑張っている子供たちや保護者の方、そして支援者はたくさんいらっしゃいます。困っているのに解決が難しいのは、一体どうしてなのでしょう。これは私がずっと考えてきたテーマでもあります。

それで、私はいろいろな研究とか実践を見てきた中で、視点を変えてみました。今日は少しでもその視点、自分のやってきたことからご紹介したいと思います。エコロジカルな視点といって、生態学的なアプローチと言われていますが、例えば一人の子供を幸せにするためには、その周りの人間関係、つながり、ここから支えていこうという考え方です。そこで4つですね。親支援、支援者支援、仲間支援、そして当事者の困っている方の支援というふうに分けてみました。

ここは、私がやってきた実践なので少しだけご紹介します。私のところには、お子さんが学校に行かなくなった、行けなくなった、あるいは子供が苦しんでいるようだというふうにご相談に来る、来れる方ばかりではありません。そこで、皆さん勉強してみませんかということで、先にサポーターになる勉強をしようということで始めてみました。たった一人のお母さんから始めてみました。もう今から十数年前です。そして勉強会を始めました。そうしましたら、その輪がどんどん広が

りまして、そして今からもう15年、16年続いています。やがてはそこで学んだ方たちが、自分が支援をしてみたいということでボランティア活動を始めてくださいました。その地域が幾つかあります。鎌倉市も取り組もうとしておりますし、学んだ方というのは、次に自分の力を生かしたいと思ってくださるということを、私は学びました。

こんな感じですね。一人の親、困っている親ですが、学ぶことでつながり、活躍することにつながり、そして自分がまたその学びを誰か困っている人の力に変えていくという、持続可能な循環型の人材育成です。人材育成といっても、当事者だった方が支援者になっていくというようなサイクルです。ここが非常に上手に循環している地域もあります。

今度は支援者同士のつながりです。私は今、人材育成ということで学校の教員を主に養成していますが、専門性が大変足りないというふうに、どこでも言われています。しかし、私は支援者と当事者というのを分けることなく、お互いに学び合える場づくりが重要ではないかなと思っています。そんなふうにして、みんなで学ぶ場というのをこれからつくっていきたいと思っています。

これは仲間です。これは、子供たちを支えていますと、少数派の子供たちだけではなく、実は周りの子供たち、多数派と言われている子供たちこそ、一緒に仲間としてお互い思いやりを学んでほしいなという視点です。それをすることによって、あの子は困っていて、私が大丈夫な人という視点ではなく、みんな自分のこと、みんなが当事者意識を持って、それぞれ、先ほども出てきましたが、できることで支え合う。私の得意なことは、あなたの不得意なこと。だけど私はこれが得意だから、あなたの不得意なことを支え合えると

というような、そういう包み込むデザインに変えていけたらいいのではないかなと思っています。

ということで、これは私の理念なんですが、SOSを出せない一つの原因は、みんなと同じにできないこと、みんなと同じでなければいけないという思い込みがあるような気がしています。私は長年、たくさんの方に出会ってきましたが、一人一人違って、誰一人同じ人はいませんでした。特に、脳の機能障害や運動障害のある方でも「違う」ということに意味があり、それはとても強いことなんだということを、私は教えてもらいました。みんなと同じでなくてもいいので、誰とも違うあなただからこそ尊いということ、これが受容と尊重ということになると思います。この安心感をお互いに持つ、その場をつくっていく、人々と出会うということが何より大切ではないかということ、これを大事にしています。

グレーという言葉があるんですけど、私は、人間は白でも黒でもなくて、誰もが最初から虹色ではないかなというふうに表現をしています。私が白で、あなたが赤で、あなたが黄色で、あなたが黒というのではなく、私たちはもともと生まれたときからみんな違う虹色であって、色の濃さが違うだけ、配合が違うだけ、そんなふうにして生きていけば、私たちの多様性と尊重というのが受容できるのではないかなと考えています。

以上です。どうもありがとうございました。



▼鈴木：星山さん、どうもありがとうございました。

これで、個々のパネリストの方々の発表が一旦終わりました。これからは、私からの質問も含めてですが、パネルの皆さんと討論をしていきたいと思います。

パネルの方々の発表を聞いていますと、これまでの制度の問題や、個々人の意識の問題や、当事者と支援者という枠組み・線引き・制度設計に問題があるのではないのかとの話が出てきました。

私から、皆さんにお考えをお聞きしたいのは、現実に「今、苦しんでいます」、「今、生きづらいです」という方々に対して、(コロナ禍ということもありますが)そのような「当事者」、いわゆる社会的弱者と言われるような方々に対して、では、「今、こうしたらよいのではないか」とのアドバイスを送るとしたら、皆さんだったら、どのような言葉を送りますか、ということについて、お聞きしたいと思います。まずは、渡辺さん、いかがですか。

▼渡辺：はい、ありがとうございます。そうですね、弱音を吐くということをしてほしいなと思うんですけど、弱音を吐いたときに受け止めてくれるかどうかは分からないかとは思いますが、それを受け止めてくれたらラッキーだと思って、そういうつながりを諦めずに探すということも一つかなと思います。

同時に、自分も誰かの痛みを傾聴したり、それなりに受け止めてあげられるような、相互的な関係のサイクルの中に入るというのはいいのかなと思います。

▼鈴木：ありがとうございます。鴻巣さん、いかがでしょうか。

▼鴻巣：そうですね、何というか、このシンポジウムというかパネルディスカッションのテーマというのが、そもそも困っている人がSOSを出す、出せるんだということが前提になっているわけじゃないですか。SOSという言葉を出してもらって、それを私たちがどう受け止めるのかという構造自体が、やはりそれ自体がSOSを出してくださいよという当事者の方々への、私たち全員が抱える課題になっているわけですね。すぐに、今後皆さんと対話を重ねていきたいとも思うんですけども、そもそもSOSを出させなきゃいけないという、私たち側の問題として捉えていきたいなというふうに思っています。

▼鈴木：ありがとうございます。制度設計に関わっていらっしゃる和田さんからコメントをもらえますか。いかがでしょうか。

▼和田：そうですね、いろんな支援策はあると思いますが、やっぱりそれが知られていない、そこにたどり着きにくいという問題はあるだろうと思います。また、今日提起された問題としては、自分が困っているということも分からない方もいらっしゃるということだし、そういったこと、強制的に連れて行くことがいいのかという問題提起もいただきました。我々としては、やっぱりいろんなツールを広げることが一番大事だろうと思いますが、皆様のご意見を伺いたいというふうに思います。

▼鈴木：ありがとうございます。視聴されて

いる方にご案内しておきます。この分科会については、パネリストとも事前に話し、この場で、臨場感を持って皆さんに届けたいと考えてまして、その意味でシナリオを作っておりませんので、ドキドキしますが、そうした部分も楽しみにしてご視聴いただければと思います。

さて、今までのお話の中で、鴻巣さんが話されていますが、当事者と支援者という分けた形での枠組みをしていることによって、様々な問題を生じさせていますよ、というご指摘は重要で、それについては、もう一度話をしたいと思います。ここでは、現実「今、困っています」、「現実今助けてほしいんです」という人に対して、「でも声を挙げづらい」、「助けてほしいけど、どこにつながればいいのか」というふうに思っている人に対して、こういう考え方やアドバイスがありますよということがありましたら、視聴されている方々がいらっしゃると思うのですが、星山さんから何かアドバイスというか、声を届けていただくことができますか。

▼星山：私はこんなふうにお話することがありまして、人間は一生困っている側で、助けてもらう側にいるわけではないということです。私たちの人生はサイクルのようなものだと考えれば、誰もが助けてもらう赤ちゃんという弱い存在で生まれて、また弱い存在に戻っていくわけです。そんなふうな人生のサイクルを循環で考えれば、自分が困っているときや、SOSを出すことが恥ずかしいとか、私たちの国の人ってみんな非常に真面目で、一生懸命で、プライドもあるから、何とか自分で頑張ろうと思ってSOS出せないと思うんですね。ですから、その気持ちに寄り添いながら、しかも今、助けてもらって大丈夫なんだよって。今助けたら、助けてもらっても、

やがてはそれを、また次の困ってる人に返せるあなたになれたらいいよという、そんな勇気づけというんですかね。私はそんなことで、安心してSOS出せたらいいなというメッセージを発散、発信するということは心がけているような気がします。

▼鈴木：ありがとうございます。今の点について、現実には日々活動されている鴻巣さんからも、もう少し追加でお話いただけますか。どうぞよろしくお願いします。

▼鴻巣：よろしくお願いします。そうですね、今、星山さんのお話を聞いて、ああ、私がふだん思っていること、ちょっと星山さんの発言が呼び水になって、ちょっと思い浮かんだんですけれども、今ある福祉制度とか様々な制度というのは、確かに不十分で穴ぼこだらけで、隙間だらけかもしれないけれども、なぜ生まれたのかというと、困った、苦しいという声を上げる人たちがいて、弱音を吐き続ける人たちがいたからこそ生まれてきたんですよね。だから、多様性というのは要するにそういうことだと思うんですよ。できない、助けて、これ無理、困ったと言う人たちがいることで、この社会というものが優しく豊かになっていきます。

私、どうしても、どうしても、助けてと言っていいんだよとか、SOS出していいいんだよというふうに言えない自分があるんですけれども、なかなかそれ自体がすごく苦しいことだって、無理難題だって分かってるので、気軽に言えないんですが。ただ、ものすごく勝手なことを、支援者としては勝手なことを申し上げるかもしれませんが、もしかしたらあなたが今、困っていることを「困った」と言うことで、あなただけじゃなくてほかの人も助けを得られる、そこにつながっていくかもしれないんだと。困っている、できないが、

この社会を豊かにしたよ、多様に豊かにしてきたんだよというところを、もし今、何がしか困りごとがあって言えないって思っている方がいらしたら、その方にはその言葉を届けたいなと思っています。もしかしたら困ったと言うことで誤解を受けたり、傷ついたりとか、もっともっと嫌な思いをするかもしれないけれども、でもその「困った」が、もしかしたら1年後の、3年後の、5年後の、10年後の誰かを豊かにするかもしれないなというふうに思います。

▼鈴木：ありがとうございます。2回目になりますが、渡辺さんにもう一点お聞きします。引きこもりの人達に写真を送ってもらうプロジェクト活動をされていたとの話が先程ありましたが、もう一度「当事者」の人達・今現実に引きこもっている人達に、何かメッセージを発するとしたら、もう一言お願いできますか。

▼渡辺：引きこもっている人たちに対してのまなざしはあるんですけど、僕もつらいことがあって、僕はあまり支援という言葉は僕自身の活動では使わず、協働とかという言葉を使うんですね。僕自身、作品を作ったり活動のマネジメントをするのがすごい大変なんですよ。何十人という、ともすると何百人とかという人たちが関わっているプロジェクトを運営するのが。その弱音を吐いたとき、結構聞いてくれないんですよ。でも、よく考えてみると、弱音を僕が吐いたときに聞いてくれない人は、自分で解決する癖を社会から強いられてきた人たちだから、弱音を吐いてお互いに相互扶助し合うという関係性のサイクル自体の必要性に気づくということが、信じられないんだと思うんですよね。だから社会にそもそもそれがあるから、自己責任化されているので、人に対して何か支援の意識を向け

ように思えない人というのは、冷たいんじゃないで、それを助け合うというサイクルに入って、その循環を経験してないんだと思うんですよ、あまり。だから、冷たい人というふうにその手を差し伸べてくれなかった人、その人だけを責めるわけにもまた、いかなさもあるなとかということも、ちょっと今、思いました。

▼鈴木：ありがとうございます。そうですね、社会的にはずっと当事者側と支援側の線引きがあり、「支援者」や「援助職」という言葉遣いがされていて、その援助職や支援者側の専門性が必要ということはずっと言われてきています。しかし、この線引き構造自体をもう一回考え直さないといけないのではないのか。この言葉を使うこと自体に、その立場の違い、線引きが表れているのではないかという話が、皆さんの中から出てきたのかなと思います。

それゆえ、ここでは、鍵付きの「支援者」という言葉遣いで、あえてこの用語を使っていこうと思いますが、今現在、鍵付の「援助職」「支援職」の人達が、「当事者」に対して、声を上げることや申請を待っている姿勢だとしたら、やっぱり問題ですよ。そうだとしたら、では、どのような形で当事者の声を、「支援者」達は、キャッチし、拾っていくのか、寄り添っていくのか、という点について、現実の活動を含めて、もう一度、鴻巣さんからお願いできますか。

▼鴻巣：そうですね。まず構造的に私たち、対人支援とか福祉、心理、医療、教育いろいろありますけれども、何かの資格を取ってどこかの組織に所属して、対人援助職を名乗り始めた途端に、もうその申請主義に絡め取られてしまうので、やっぱりSOSを上げる、「助けて」と言うという役割を当事者の方に担わせて、そこに依存しているという構造そのも

のを変えるというマクロな視点は大事だと思うんですね。NPOや子ども食堂とか、そういった支援もすごくいいんだけど、NPOとか私たちのような市民活動とか様々な団体というのは、制度の隙間を埋める活動を細々と皆さんやっぺらっしゃるので、そもそも隙間を作らないというところにお金と人員をたくさんかけてほしいなという思いがあった上での、すみません、ちょうど（厚労省の和田さんが）いらっぺらるので、じゃあそれでも今、現場にいる私たちがどんなマインドで支援、「支援」をしていけばいいのかというと、ちらっと私の発表でも申し上げましたけれども、トラウマというものへの理解というものがすごく今、求められているなというふうに、現場で実感しています。

トラウマインフォームドケアという言葉が、ようやく現場で少しずつ普及され始めたんですけれども、まだまだ浅いかなと思っています。困窮とか暴力の被害とか、様々な抑圧だったり搾取という、その逆境ですよ。深い深い傷つきを経験すると、自分自身の尊厳とか自己価値観というものが、どんどんどんどん損なわれてしまう。そうすると、やっぱり自分自身には価値がある、自分の声が誰かに聞いてもらえるというような、そういった実感というのがもうどんどんこぼれ落ちてしまうわけですよ。そうすると、自分には価値がないとか、自分なんて誰からも大事にされるはずがないとか、自分の願いなんてかないっこないんだという信じ込みが生まれる。結果として、やっぱり誰にも相談できなかったりとか、自分や周囲を傷つけ振り回すような行動をしてしまう。

自己責任論というものが今、あちこちで問題にされていますけれども、やはり自己責任にしか見えない行動を、周りからはそうしか

見えない行動をとってしまっているという方々が、一定数、やっぱりいらっしゃるんです。深い深い傷つきを持っているからこそ、そう行動してしまう。支援者の中にも、そのトラウマというものがそういった人の行動をどう変えていくのかということに対する理解がまだまだ浅いので、相談という場所でも私たち支援者が、理想の弱者探しをしてしまったりとか、品行方正さをその当事者に求めてしまうことで、せっかく相談に来たのにその相談の場で二次被害を受けて、どんどんその支援から遠ざかってしまうことが起きている。なので、そのトラウマという構造への理解。困った人だなこの人という方々と出会ったら、いや、もしかしたらすごい困ってる人かもしれないよというところから想像を、その現場で広げていくということが、今、私が大事に思っていることです。

▼鈴木：どうもありがとうございます。鴻巣さんは、理路整然とお話されるので、ずっと「支援者」の立ち位置なのかと思ってしまっていました。（私がもっている書籍）これ映らないですかね。鴻巣さんの本、『ソーシャルアクション！あなたが社会を変えよう！』の本ですが、全部読ませていただいて、涙が出ましたんですけれども、鴻巣さんご自身の…

▼鴻巣：それ、古い本なので、何かもう今読み返すと恥ずかしくてしょうがないので、あまり皆さんに買っていただきたくないんです、すみません。

▼鈴木：いえいえ、私にとってもバイブルとなります。鴻巣さんご自身も「当事者」として様々なご経験をされながら、今の活動に至っている点が、詳しく書かれていました。

そして、制度の問題について、これについては、今鴻巣さんが言われた話を、自治体・行政が考えて行かねばならないし、鍵付き「支

援者」という言葉を使わせていただきますが、「支援者」には、鴻巣さんの自己責任論について、広く自戒していただきたいなと思います。

この点で、この議論に関連して、研究者としても、また実際に社会的活動実践もされている星山さんから、コメントをいただきたいと思います。

▼星山：はい、ありがとうございます。私、今の話聞いていて、私の分野でね、自立活動というのがあるんですね、自分で立つって。何かこの子が一人で生きていけるように、いろんなことを訓練しなきゃいけないんだろって、教員やってた頃思ったんですけど、あるとき、本当の自立とは、依存先をたくさん見つけることってお話を伺って、ああ、もう本当にそうだなって思いました。でも依存先というのも、困ってからというよりは、ふだんからいかに自分の周りに温かいコミュニティがあるかという話なんだろうなというふうに理解しましたし、また、今のお話も、本当に自分が困って傷ついているときに誰に相談に行くか。相談相手を間違えると、より深く傷つくんですね。そしてもう二度と、人間そのものが信頼できないというふうになっていくという経験を防ぐために、逆にそんなときに自分のことを励ましてくれて、自分に寄り添ってくれた人のことってずっと覚えてますし、そしてまた自分が大丈夫になったときに、その相手じゃないけれど、自分はまた誰か同じ立場の人の力になりたいって自然に思うと思うんです。だから、結局人間って、自分が困っているときに誰に出会うかってすごく重要で、そのときにいい方に出会った方が、いい循環をつくっていくということなので、やっぱり私はふだんからのコミュニティづくりってすごい重要だなと思っているんですね。

せっかくマイク持ってるので、ちょっとい

ろんな方が聞いてくださっているのです。私、それで、もうこの国ってね、コミュニティが壊れたんだと思うんです、本当に。昔からあったんだと思うんですよね。井戸端会議もあったし、縁側でいろんな方とお茶したりとかね。でもそういう場面がなくなってって、みんな孤独、孤立になってって、つながる相手がコミュニティに見つからなくなっていったということがあるので、これは相当意図的につながりを作らなきゃいけないんじゃないかなと思っていて、私が今、考えているのは、とにかく新しいところに行くとき、新しい学校に入るとき、新しい転入するとき、やっぱりウェルカムプロジェクトをやるべきかなってすごい思っていて。大学なんかでも、今、もう1年生にウェルカムプロジェクト絶対やるんですね。つながり作ってあげないと、非常に難しい。しかもそれが、本当は同い年じゃなくて多世代、異年代、異年齢の温かいコミュニティづくりを、どこで誰がどうやるかということ。何かこういうことをふだんから考えていくことが、結局自分がSOSを出したいと思ったときに、誰に相談し、誰とつながるかということへとつながっていくのではないかなというふうに感じています。

▼鈴木：ありがとうございます。私も以前行政にいたので、公の機関側がどうすべなのかという思考回路で考えがちですが、行政側の振舞だけでなく、今星山さんおっしゃったことは、どこでも大事で、私は今、大学に移りまして、この大学でも、またそれ以外にも、様々な場所で、新しい場所に移ってきたときとにかく、ウェルカムがあるって、すごく大事なことだな、いいことだなと思いました。

私の専門分野の社会的養育の場面で、思い出したことがあるので、関連して話させてもらおうと、子ども達が一時保護所に入る場面、

それは自分の意思ではなく入らざるを得ない場面が多くあるのですが、全国をヒアリング調査したときに、ある一時保護所では、ようこそとの意味を込めて、入ったときに花を部屋に用意していると聞きました。また、一時保護所では選択することが非常に限定的である、でも、選択なく決まった歯ブラシを支給するのではなく、数はないのだけれど、少ないけど2種類・3種類の中でどれがいいのかとの選択を尊重するとの話を聞いたことがあります。こうした配慮や選択の尊重がなされない方が多いのが現実であると認識していますが、この話と星山さんのお話はつながっていて、いかに新しい場所でのウェルカムを感じさせてあげるかということは、すごく大事なことだなと思って聞かせていただきました。

星山さんのこの書籍（手元で映し出す）、私の愛読書でゼミ員にも紹介していますが、先程星山さんの発表の中でも紹介されていましたが、『ちがうことは強いこと』ってすごい本です。この薄さの中に、ぎゅっと内容がつまっています。心が辛いときに、どのページでも良いのでちょっと開いてみてください。心が、必ず、ほっとし、安心できると思います。

そして、これまで、鍵付きで、「当事者」と「支援者」の線引きの話をしてきましたが、どちらの立ち位置から読んでも、ほっとし、また気付きや学びが一杯あります。今日パネルを視聴した後に、ぜひ読んでいただきたいと思っています。

パネルに関しては、次のテーマに移ります。テーマとしては連続的ですが、今、コロナ禍ではありますが、このコロナ禍で皆さんが見てきた景色はどうだったのか。どうコロナ禍を感じているのか。また、これからポストコロナ、ウィズコロナということが言われます。その見立てはどうか。このコロナ禍に対する見方

としては、マイナスだけではなくプラスの面もあったとの評価もあるのですが、今、現実に皆さんがどう見ているのか教えてください。渡辺さん、鴻巣さん、星山さん、企画官との順番でお話いただければと思います。

では渡辺さん、お願いいたします。

▼渡辺：はい、ありがとうございます。コロナ禍においては僕の発表の中でもあったように、月を介して他者を想像するというアートプロジェクトを、ずっと去年の春から続けています。問題を顕在化させる、可視化させるということがすごく語られている中で、他者の姿がなかなか見えない、対面できないという時代になったときに、対面する価値、見える、見せる、見えるようにする価値だけじゃなくて、見えないことで想像することということにも僕は気づきました。孤立問題って基本的に、手を挙げてつらいですということを言った時点で、孤立性ってちょっと和らいできていて、構造的に。本当の孤立って、自分から背を向け続けている人の場所にあったりもするじゃないですか。だからこの社会には絶対…絶対というか、出会うことが難しい他者がいるということを、その人でももしかしたら月を見ているのかもしれないということを紹介して、ある種アートというのは想像力を誘発することができる一つの媒体だと思うので、そういうことを行っています。

アフターコロナ、僕はアフターコロナって言い方してるんですけど、コロナが終わって、結構未来に社会が前を向いていくというのは、スキンシップが再開して、また居酒屋で出会い、人がハグをするような時代になったときに、スキンシップや、また会うということから、なおも取り残されていく人たちの孤立性というのはより深まると思っていて、僕は継続的に孤立している人々に、コロナ収束、和らい

でいく中で、こちらから会いに行くというアートプロジェクトを考えています。今そんな準備をしています。

▼鈴木：どうもありがとうございます。では鴻巣さん、いかがでしょうか。

▼鴻巣：私たち子ども食堂もやっていますので、やはり結構小っちゃなお茶の間に20人ぐらいが密密に集まる活動であったので、コロナ禍における自粛であったり、感染防止、ステイホームの中では、一番批判を受けそうなスタイルの活動だったんですね。やはりあのときの空気、今もその空気の名残がまだまだありますけれども、感染防止に右へ倣えという中で、やはり集う場所というものがどんどんどんどん閉鎖に追い込まれて、子ども食堂もその活動自体がなくなったりとか、あるいは食品を配るということにシフトを変えたりとかということがありました。

ただ、私たちがずっと考えてきたのは、感染症というのはもちろん公衆衛生上のすごく重要な課題ではあるんですけども、公衆衛生上の課題は感染症だけじゃないわけなんですよ。暴力の被害とか孤立、その経験によるメンタルヘルスへの影響というものも、もちろん公衆衛生上の重要な課題なわけですよ。どうしても感染症ばかりがクローズアップされて、メンタルヘルスというものが軽んじられていたと。今から振り返っても、そのときを私はそう評価しています。結果として子供、そして若年女性の自死というものがばんと跳ね上がった数字として表れているわけですね。ですので、私たちは当時から、もう1年、2年前から命と健康のリスクは感染症だけではないよということを合言葉に、ずっと活動を変わず、もちろん感染対策しながらですけども、子ども食堂の活動もそのほかの活動も、いつもどおりを続けてきました。

なぜそういった選択をしたのかという動機づけの一つに、ここ福島ですので、東日本大震災のときの経験があるんですね。東日本大震災のときに、もちろん地震、津波の、それから被害で、あとは福島の場合は原発事故による避難ということで、避難所であったりとか仮設住宅だったり、多くの方が避難生活を強いられてしまった。そのときに震災の被災だけではなく、様々な苦しみを抱えている人たち、例えば虐待の被害に遭っている子供だったりとか、DVの被害に遭ってる女性たちのそれぞれの生きづらさがすごく軽んじられたんですね。避難自体がもう世帯単位でぱっぱってなってしまうので、虐待やDVを受けている人たちが、家族だけでも一緒にいられないと訴えたとしても、今はそれどころじゃないからといって、みんな緊急事態なんだからといって、その声がとても軽んじられてしまった。避難所ではいろいろな性被害が起きていたんだけど、それも今は仕方がないでしょ、みんな大変だからということで軽んじられてしまった。女性や子供だけではなく、障害を持っている方々、発達障害を持っている方々で、共同、集団での場所にいることが難しい人たちも、今はそれどころじゃないでしょということで、そういった苦しみで軽んじられてしまった。やはりみんなが大変になると、それぞれの、ふだんからすごく大変なしんどさを抱えている人たちの苦しみは、もう今はそれどころじゃないからといって軽んじられてしまってる経験を東日本大震災でしてきていて、同じ空気を、今それどころじゃないよって、虐待も、孤立も、暴力の被害も、搾取も、今はそれどころじゃない、今はもう感染症でみんな大変なんだからって軽んじられているなという空気をあのとき感じたものですから、いろんなところか

らもしかしたら批判もあるかもしれないし、看板に何か落書きでもされるのかもしれないなんていうふうに思いながらも、もうずっと子ども食堂を開き続けてきました。これから何度同じようなことが起きたとしても、私たちは同じ選択をするだろうなと思っています。

▼鈴木：ありがとうございます。様々なアドバイスを処方箋を含めて話していただきました。和田さんは、いかがでしょうか。

▼和田：コロナで、もちろんよくなった点もあると思います。1点は政策の流動性はすごく高まって、早くなったと思います。ちょっと前の、鴻巣さんのご発言にあったんですが、いろんな制度の狭間がある。確かにそのとおりで、なかなか難しいんですけど、ちゃんとした制度を作るのって、本当は1年以上かかって、そうやって作っている間にがちゃがちゃやって、やっと固まったら、何か世の中の課題は移ろっているということもよくあります。今回すごく政策の流動性は高まって、いろんな支援策を連続で打ったこと自体は悪いことじゃないんだろうなと。ただ、その代わりいろんな整合性は失われているし、実際は何かいろいろ見えてきたけどよく分からないという状態にもなっていると思っていて、このコロナの経験を踏まえて、ちゃんとこういったことを統合して、我々は今、メニューの支援策の一覧づくりということをやっていますけれども、こういったことがやっぱりこれを経てよかったなと思えるようにやっていかなきゃいけないなというふうに思っています。

▼鈴木：ありがとうございます。コロナ禍での気になる点について、星山さん、お願いできますか。

▼星山：私は2点気になってることがあります。1つは先ほどもおっしゃってましたけど、人間の皮膚に触れなくなったということです

ね。これはもう哺乳類として私たちが生まれた瞬間、母親に抱かれて安心するという、それで人間なわけですから、もうそれをみんな体験しなくなったというのは本当に恐ろしいことだと思います。特に子供たちもそうですし、どんなに駄目って言っても人は人を求めて、接触することで安心感を得ているので、これをここから工夫して、どんなふうにして保障していくかということ。これは子供の発達に対してですけど、大きな課題が残ると思います。

もう一つはコミュニケーションを丁寧にしなければいけないということで、もうマスクが当たり前になって、半分表情が見えない中で、大人はあまり感じていないかもしれませんが、これが当たり前で子供たちが大きくなっていくということ。誰もこれは人類が体験したことないので、もう私たちの思っていることを丁寧に相手に伝え、相手が何を思っているか理解し合うということ。これもSOSを出し合うときに非常に大切なところだと思いますので、ぜひ覚えておきたいなというふうに思っています。

▼鈴木：どうもありがとうございます。少しでもパネリストの方々の言葉を聞いていきたいので、休憩はカットさせていただき、続けさせていただきます。

今、会場・視聴の方から質問を幾つかいただいておりますので、私の方で、今進行しながら、ピックアップさせていただいて、パネルの方にお聞きするようにします。

まず、1点、渡辺さんに対してです。渡辺さんのソーシャルアクション、感心しました。「私は引きこもりという言葉で、世の中が抵抗感を持っていると考えています。アートという観点から、これからも印象を変えてほしいです。今後の活動の展望について教えて

ください。」先ほど話されていましたが、この質問に対して渡辺さんもう一回お願いします。

▼渡辺：はい。フリーハグってあるじゃないですか。皆さん知っていますか。コロナ前に、僕は渋谷に何か用事があって行くと、駅前でユーチューバーの方とかかな。ハグ、フリーハグというボードを持ってハグをされている方々がいて、微笑ましいなという感想と同時に、ちょっと僕、苦手だなと思ってたんですよ。というのは、本当にハグが必要な人にハグが届けられてないような気もちょっとしていて、僕は、既存のフリーハグをどうやって更新できるのかというアートプロジェクトをやりたいんですよ。だから、僕とフリーハグをしてくれる引きこもりの人を募集をして、日本全国どこにでも行きますというプロジェクトなんですけれど。うん、あくまでその方の個人情報丁寧に保護した上で、そのドキュメントをとっていきたいんですよ。スキンシップが再開して、もう孤立問題というのは過去のものであるという時代が、そういうふうにならないでほしいんですよ。より見えないものが見えなくなっていく時代になるのであれば、どうやってそれをまた掘り返していくか、そこに意識を向けていくかということをやっていききたいなと、今、計画を練っているところです。

▼鈴木：渡辺さん、ありがとうございます。質問の方、こういう形で渡辺さんは新しいプロジェクトをされるとのことですので、期待していただければと思います。

また、次の質問、全員の方となっています。読み上げます。「希望を失った際、困っている私は、自分に何ができるのか」。「自分ごととして経験があるのですが、SOSの声を出す力が出ない瞬間も多いと思います」「そんな状況のときどうすればいいのか。」「そこを掘り下

げることにヒントがあるのではないかというふうを考えていて、その点のアドバイスも含めて教えてほしい」との質問が来ております。全員に、ということで、今度は、回答の順番をシャッフルさせていただきます。和田さんからお願いできますか。

▼和田：窓口に来るというのは多分一番難しく、その前が電話相談。一番簡単なのはメールまたはSNSなんじゃないかと思います。いろんなツールをつくって、かつこれからの支援は少しずつデジタルに寄ってくるんじゃないか。最終的にはこちらもプッシュ型の支援ということを準備していきたい、ちょっとずつ変えていきたいと思っています。なかなかすぐに全部はできないんですけども、いろんな形で声を拾い、支援を届けられるようにしていくことが大事なんじゃないかなと思います。

▼鈴木：ありがとうございます。渡辺さん、もう一度お願いします。

▼渡辺：そのSOSを言いづらいということが、いろんな深さがあると思うんですけど、ごめんなさいね。言いづらい前提で、どうやれば言いやすくなるかという一つの方法を、僕が経験したそれは、やっぱり他人のSOSをこっちから（傷ついている側からも）拾いに行くということかなと思っていて、ピアサポートという言い方もありますけど、相互扶助の空気を起きてないところに、対してまず自分が痛みを負いながらも、他者の痛みにも気づくということをしないと、自分が助けてもらうばかりにもなるということも、ちょっとやっぱり思うんですね。だからいつだって、弱い自分だからこそ、誰かに対してその痛みの感覚を共感できる精度というのを持ち備える、その才能を手に入れることが痛みを負うことでもあると思うので、痛みを負ったことに

よって感受できる他者への共感性というのも作られているからこそ、他者に働きかけをあえてするというのもいいかなと思います。

▼鈴木：ありがとうございます。鴻巣さん、お願いします。

▼鴻巣：この質問をくださった方のご経験とは、また多分全然経験の内容も深さというものも違うかと思うんですけども、私自身にもSOSの声を出す力が出なかったときというのはあって、そのときを何だかよく分からないけれども、とりあえず切り抜けて今があるんですね。そのときのことを振り返ると、ただただ生きて息をしているだけで、人って自分にとってすごくいいことをしてきているんだなということに気づいたんです。というのは、私たち毎日当たり前にしていることの一つ一つが、実は自分へのケアだったりするんですね。朝、例えば起きられたとしたら、朝起きる、布団から出る、着替える、顔を洗う、何かを口に入れる、顔を清潔にする、お風呂に入るとか、必要なものを買うだとか、灯油を注文するとか、毎日毎日生きていくということは、自分に対していいことを積み重ねているということなんですよ。そのうちの幾つかができなくなってしまったとしても、ただそこにいるだけで、そこにいて息をしているというのは、絶対に自分で自分に対して何か小さな、当たり前のことかもしれないけれども、絶対に何かセルフケアをしているということだと思うんです。そのとき気づかないけれど、後になって分かるんです、そういうことって。なので、みんなそのセルフケアって当たり前のことなので、その価値に気づかない。だけれども、SOSの声を出そうとか、助けると言おうとか、何かしようとできなかったとしても、今、絶対に自分に対して小さなセルフケアをしているんだということなので、

何かもう一つしなくても、そのままでもとりあえずいいかなと思います。そのまま、きっと自分にとっていいことができているということ、まずそこからかなと。ちょっとご事情が分からないと、何か相談してください、電話してくださいとか言いづらいんですけども、何かすみません、そういったことしか言えなくて申し訳ないです。以上です。

▼鈴木：ありがとうございます。では、星山さん、お願いします。

▼星山：私は、学校に行くのがつらくてしょうがないなと言っているお子さんから、あるカードをもらったんですけど、小学生でしたけど、「疲れは頑張りの証」と書いてあったんです。私そのカードをぱっと見たとき、とても胸が熱くなって、今おっしゃってましたけど、何かをしなくちゃいけないとか、頑張らなくちゃいけないとか、そういうこととは多分違うことで、今もう困っていて希望を失うというところまで来ている方は、きっと今まで一生懸命生きてきた方で、今は休んでもいいし、あなたがただそこにいて、あなたがそこにあって、するってことじゃなくて、あなたの命がそこにあるということ。これからじゃなくて、今までやってきた、今まで頑張ってきた全てのことを自分自身で、ああ、これでよかったんだなって、そんなふうに考えていくと、もしかすると次が見えるかもしれない。だから、慌ててアクションを起こすということより、今まで自分がやってきた全てのこと、存在してきたことに気がついて、全て意味があるんだって思い出していただけたらいいなと思います。以上です。

▼鈴木：ありがとうございます。質問に対する回答も含めてさせていただきました。

討論の最後になりますけれども、パネリストの間での質疑をします。あの人のあの発表・

発言について、もう少し突っ込んでここを聞きたい、という点があれば、残り時間の制限はありますが、ちょっと手を挙げて受けたいと思います。いかがでしょうか。

はい、では、渡辺さんどうぞ。

▼渡辺：この打合せのときにもちらっと提案しましたが、和田さん、つながるということが強く叫ばれている時代において、つながらない権利ということをどう捉えているのかということをやっと改めてお聞きしたいなと思いました。

▼鈴木：では和田さん、お願いできますか。

▼和田：難しいご質問をありがとうございます。どっちかという、私は星山さんのご意見にもありましたけど、やっぱりつながりが失われている社会の中で、どうやってつながりを作っていくかということだと思うのですが、やっぱりそのときに支えられる側の視点を失ってはいけない、もしくは支える・支えられるという関係性が、やっぱり溶け合ってくる社会を作っていくのが一番大事だと。そういう中に、つながらない権利というのも出てくるんじゃないかなというふうに思いました。あまり答えになってなくてすみませんけれども。

▼鈴木：渡辺さん、追加ですか。はい、どうぞ。

▼渡辺：多分、孤立という概念に対するケアとしてのイメージみたいなものも、多分社会に対して、社会の中にあって、その不幸感みたいなものを払拭させてあげなきゃいけないみたいな視点があたりとかすると、どのような、どういうニュアンスで、その当事者がどのような困りごとを持っているか。必ずしもどれぐらいつながりたくて、どういうときつながりたくて、そして逆にどういう事情でつながりたくないのか、人と出会うのが怖いのかとか、そういう固有の当事者性に対する

対話とか聞き取りにまで、何か制度なり人への優しいまなざしが社会に生まれればいいのかなとも思うんですけど、こういうふうにするにはいいよというふうに、話を聞かずに動き出しちゃう危険性とかというのが、だから引きこもりの人を引きずり出しちゃうとか、そういうことが現場で課題にはなっているなどののを、ちょっと今、改めて思い出しました。

▼鈴木：ありがとうございます。では、和田さんから、コメントあればどうぞ。

▼和田：ちょっとだけ追加で申し上げます。確かに引きこもりは専門性のある分野で、孤独・孤立対策の中にも入れていますけども、ちょっと違う部署でやっていますし、窓口も引きこもりは分けているということは、ちょっとご紹介したいというふうには思います。

孤独対策というのもまた一つ新しい分野で、かつそういう精神的なところに国の制度で入れるのかというのは、常に自問自答しながら進めていますけれども、まずは孤立、一つ一つの困りごとに対する制度を周知をし、それを統合してどのように孤独対策を進められるのかというのは、今、自分も悩みながら進めているところです。

▼鈴木：どうもありがとうございました。シナリオなく、いきなり質疑を行っているので、パネリストの方も、フル回転で大変だったかと思いますが、回答ありがとうございました。

いよいよ本当に最後になってしまいました。お1人30秒ずつぐらいで、本日の感想、またこれだけは言っておきたいことについて、話をお願いします。その後、私のまとめに移らせていただきたいと思います。では、もう一回、和田さんからいいですか。和田さん、渡辺さん、鴻巣さん、星山さんという順番でお願いできればと思います。

▼和田：今日は皆様の貴重なご意見聞かせて

いただきまして、本当にありがとうございました。孤独・孤立対策もまだまだ始まったばかりです。自分自身も悩みながら進めています。ぜひこれからも発展していけるように、今日の機会を活用しながら進めたいと思いますし、引き続きご意見のほういただければと思います。今日はありがとうございました。

▼鈴木：ありがとうございました。では渡辺さん、お願いします。

▼渡辺：支援において、共感的な傾聴とかが必要だということをよく聞くんですけど、同時に支援される側も、共感されやすい困窮者は助けられやすいんですけど、共感されづらい困窮者というのは悪人にされたりとか、より深い孤立の状況になっていくのかなと思っていて、なるべく、必ずしも共感が究極的な答えではないなと思っています。だから、ちょっと考えることが大事だと思うんですけど、理性的にどのように困っているのかなということを、感情だけではない方法で、他者について想像する時間が持てたらいいなと思っています。以上です。ありがとうございました。

▼鈴木：ありがとうございました。鴻巣さん、お願いします。

▼鴻巣：時間があっという間に過ぎていてびっくりしました。SOSを出せるということ、それからつながるということ、それを無条件によいものだというふうにしてしまうことから、まず疑っていきなという思いを強めた時間でした。

▼鈴木：どうもありがとうございました。星山さんお願いします。

▼星山：今日はいろんなお話聞けて、私もとても勉強になりました。最後に出たお話のところで、一律ではない居場所とか安心感、これをどういうふうにもうまさに多様性なんだ

と思いますけど、つながり方にもいろんな選択肢があって、ただただ一緒にいるだけではない、様々な人の尊厳といいますか、違いに対しての尊重、こういうものが多様な社会の中でそれぞれ幸せに生きていくために、どうやってつながっていくかというところの大切な視点なんだなということを感じました。これから本当に皆様もいろいろなところで、温かいコミュニティづくりというのはとても大事になるかなと思いますので、それぞれの場でつなげていけたらいいなというふうに思いました。ありがとうございました。

▼鈴木：皆さん、どうもありがとうございました。本日のパネリストの方々の発表と討論を通して、小さなSOSに気づくための処方箋が様々示されたと考えております。SOSの声を上げられず被害に遭い続けた経験、SOSの声を上げているにもかかわらずキャッチされなかった経験、否定された経験、そんな経験からだんだんSOSが発信できなくなる。社会的孤立が進む。そういう事態は決して例外ではなくて、今の現状であり、日常であることが、今日のパネルで皆さんから出てきたことです。

こうした社会の中で日々暮らしていく私達は、時に当事者になり、時に支援者となり日々暮らしています。その意味では、社会的孤立を個々の問題、医学モデルで捉えるのではなくて、社会、制度側に問題があると考え、社会モデルでとらえていく。私達、社会の側で、ハードルを下げて、耳をすますことで、見て感じてみる。私達は、時に人の服を着てみる、又は自分の物差しを捨ててみる、そういうことが大切なのではないのでしょうか。こうしたことも、今日のパネルの中で出てきたのかなと思います。そうしてみると、実は、様々なSOSが私達の周りであふれ出ているのだとい

うことに、気づくことができるのではないのでしょうか。

今日のパネルディスカッションを通して、私たち一人ひとりが小さな一歩、アウトリーチをしていくことが重要であり、それが子どもたちをはじめとするいわゆる「社会的弱者」を笑顔にし、命を守る（命を守るとは心と体を継続的に守るということですが）、そのことにつながるのだということを実感できたのではないかと考えております。

そして、つながる、関わる、一人にしないというときに必要な視点として、先程も出ましたが、「そのままでもいいんだよ」ということ、「対等性」と「個々人の尊厳・尊重」ということが、非常に大事な視点で、行政をはじめ、私達が忘れてはいけないものなのだと話し合いました。その意味では、私達一人ひとりにベクトルを向けたパネルでもあったと思います。

最後となります。ここの地、鎌倉は、「共生社会の実現を目指す条例」をつくり、市長をトップに、一丸となって、共生社会の実現に取り組んでおり、私自身、非常に注目をし、応援しています。最後に、この条例の前文を読ませていただいて、終わらせていただきたいと思います。

「[すべて国民は、個人として尊重される。]からはじまる日本国憲法13条は、個人の尊厳及び幸福追求権について規定しています。私たちの年齢、性別、性的指向や性自認、障害及び病気の有無、家族のかたち、職業、経済状況、国籍、文化的背景などは、それぞれ異なります。多様な人々が尊重され、どのような立場になろうとも、自分らしくいられる社会が、私たちの目指す共生社会です。

近くにいる人の生きにくさに思いをめぐらせてみましょう。

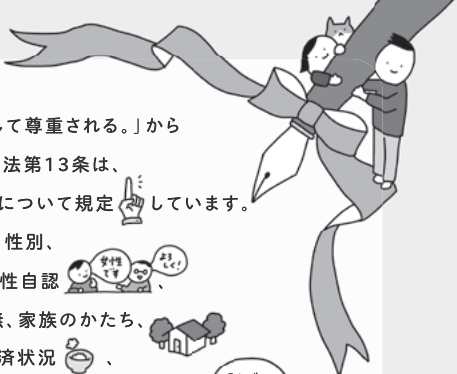
自分らしく生活したくとも、多くの人にとっての「ふつう」や「当たり前」を前提とした社会に、生きにくさや居心地の悪さを感じる人がいます。「ふつう」や「当たり前」の意味は人によって違うからです。互いの違いを思いやり、配慮することで、人はみな、共に生きられます。目に見える事物はもとより、目に見えない、あるいは言葉にできない生きにくさに気づくことが、共生社会の一步となります。

ます。

私たちは多様性を認め、互いを思い、自分らしく安心して暮らせる社会を、鎌倉市において実現するために、この条例を制定します。」

この前文を、もう一度この地で、皆さんと確認して、このシンポを終わりたいと思います。パネリストの皆さん、どうもありがとうございました。会場・視聴の皆さん、ご清聴どうもありがとうございました。

鎌倉市共生社会の実現を目指す条例（前文）



「すべて国民は、個人として尊重される。」から

はじまる日本国憲法第13条は、
個人  の尊厳及び幸福追求権について規定  しています。

私たちの年齢 、性別、
性的指向や性自認 、
障害及び病気の有無、家族のかたち、
職業 、経済状況 、
国籍 、 文化的背景などは、
それぞれ異なります。

多様な人々が尊重され、どのような立場になろうとも、
自分らしくいられる社会が、
私たちの目指す共生社会です。

近くにいる人の生きにくさに思いをめぐらせてみましょう。
自分らしく生活したくとも、多くの人にとっての「ふつう」や
「当たり前」  を前提とした社会に、
生きにくさや居心地の悪さを感じる人  がいます。

「ふつう」や「当たり前」の意味は
人によって違う  からです。

互いの違いを思いやり、配慮することで、 人はみな、共に生きられます。

目に見える事物はもとより、目に見えない、
あるいは言葉にできない生きにくさ  に気づくことが、
共生社会への一步となります。

私たちは、多様性を認め、互いを思い、
自分らしく  安心して暮らせる社会を、
鎌倉市において実現  するために、
この条例を制定します。

今日から
みんなです！